

## 北海道で中学生が部活動

北海道東川町の永樂寺（永江童心住職）は8月のお盆前後の2回に分けて、福島県の子どもたちを受け入れた。全国の宗教者で組織する「原子力行政を問う」の宗教者会（直す宗教者の会）の呼びかけに応えたもので、55人の子どもたちを長年、 Chernobyl の事故で放射能被害に苦しむ子どもたちの受け入れを始めた。この活動は、多くの宗教者が「原発反対」の立場を表明する機会ともなった。

育館が使えたかった生徒は、近くの東川中学校の女子バレー部と毎日合同練習を行った。両部員たちの親交は深まり、旭山動物園や富良野へ観光するなど、時間ほど話した。

最終日前夜には、引率の中学校教員から仏教やバラルーシの話を聞いてほしいという要望を受け、永江住職が1

者ら36人を受け入れた。同寺には、子どもたちがはしゃぐ元気な声が響き渡つていた。永江住職は「今後も継続的に支援活動を続けたい」と語る。

け入れに協力する永江  
住職は「東日本大震災  
の発生直後にベラルー  
シから『私たちより日  
本の子どもたちを守っ  
てほしい』と連絡を受  
けていた。すぐに協力  
させていた」だと  
話す。

8月3日から1週間  
は、福島県郡山市の高  
瀬中学校女子バレー部  
員ら19人が同寺にホー  
ムステイ。震災後、体

つかの間の夏休みを満喫していた。同寺門信徒からは新鮮な野菜な

19日から6日間は、  
二本松市の同朋幼稚園  
の園児や小学生、保護

どが差し入れられた。  
最終日前夜には、引率の中学校教員から仏教やベラルーシの話を聞いてほしいという要望を受け、永江住職が1時間ほど話した。

者ら36人を受け入れた。同寺には、子どもたちがはしゃぐ元気な声が響き渡つていた。永江住職は「今後も継続的に支援活動を続けたい」と語る。